

「個別」と「協働」を一体化する小学校国語科授業づくり

—ICT 機器の効果的活用の検討を通して—

愛媛大学教職大学院 田頭 良博

1 問題の所在

現在、学校現場実践での中心課題の1つは、中央教育審議会が2021年1月26日に公表した『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～の視点に立った授業の具体化である

国語科においては、「話す・聞く」「書く」「読む」という、そもそもが「個の属性としての行為」を「他者との相互作用」により高め合うことで、個の国語力の向上へとつなげていく授業研究を行ってきた歴史があるが、県内はもとより、全国の国語科研究大会等の研究においては、個々の事例は散見されるものの、モデルとしての授業像は未だ見えていないのが実情である。

そのモデル構築の難しさについて、報告者が考える要因を2点述べる。

【要因①】「個別」と「協働」の一体化の具体場面を帰納法的に一般化することが難しい。

単純化して考えれば、「個別」と「協働（共同）」は、児童の学習場面としては「異なる場」であり、イメージとしても対立概念としてとらえられかねない。

【要因②】国語科特有の能力論とICT機器活用の効果的検証が難しい。

個別の言語活動は子供一人一人の身体性と一体化している行為であるが、ICTによる作業効率化により、却って「言葉の学び」という国語科の学力伸長を阻害する恐れさえ危惧される。

以上の問題を踏まえながら、「国語力が高まるということはどういうことなのか」という課題意識を根底に据え、ICT機器の効果的な活用に焦点を当てて小学校国語科の在り方を検討する。

2 研究の方法

本研究では、小学校物語教材を扱った実践を複数分析し、研究テーマに係る授業モデルの検討を行う。具体的には、まず、ICT機器を授業の核とする展開を構想・実施し、授業展開や教師の指導の妥当性について、児童の学習状況や授業後アンケートを分析し検証を行う。そして、別に、ICT機器を使用しない方法で、従来の「読むこと」の基本形（三読法）の工夫した展開の授業を構想・実施し、この分析を行う。

3 実践の概要

【事例A：ICT機器を展開の核とした事例】

- (1) 実施時期 令和4年10月下旬～11月上旬
- (2) 対象 愛媛大学教育学部附属小学校3年
- (3) 単元名 「モチモチの木」を読んで考えよう（全9時間）
- (3) 単元目標 「モチモチの木」を読み、叙述から、人物像や作品のよさに気付くことができる。
- (4) 単元の流れ

次	展開
一	【問いづくり】 ・「豆太」の人物像・「モチモチの木」の意味、及び作品価値について、個の意見表明→全体での検討→課題整理・焦点化
二	【課題追究】 ・一次の課題の追究。個⇄全体の往還
三	【まとめ】 ・課題に対する全体でのまとめ→個の感想の整理

- (6) 各時間の流れ

○各時間とも共通して次のような流れで展開

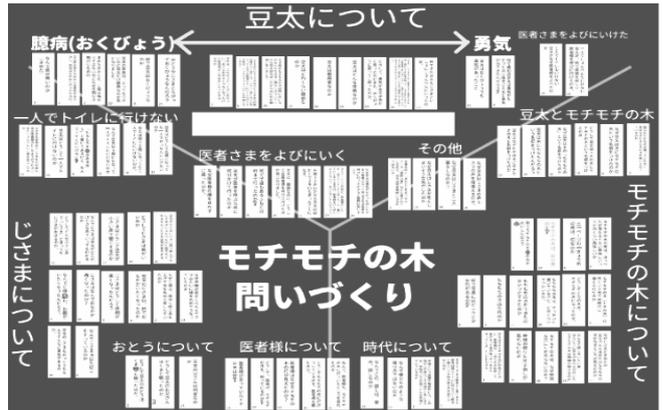
- ①課題への個の意見・ロイロノートへの反映
- ③話し合い

- ②教師による集約・論点整理
- ④全体での整理・個々の振り返り

(5) 授業の実際
(第1時)

初読後、授業者は、○「モチモチの木」はどんなお話か考えよう。○豆太はどんな人か考えよう。との問いを投げかけた。授業者は、ロイロノートに書かれた言葉を、テキストマイニングにより整理し、課題を焦点化した。さらに、出できた感想を三角図にまとめ、論点整理をしていった

課題は、「豆太」「じさま」「作品の印象」に集約され、これが、次時以降の課題となった。



【資料1 課題・論点整理を示した図】

(第3時)

本時の学習課題は、「豆太と医者様がモチモチの木は違うのか考えよう。」である。児童は、自分の意見をロイロノートに書き込んだ後、授業者のコーディネートにより、他の児童の意見を確認しながら質疑応答を行っていった。コーディネートのポイントは、「同じトチの木であっても、豆太にはそのように見えた（思えた）」ということの理解。そして、「そう見えた（思えた）理由」についての考察である。

児童は、教科書とパソコンを確認しながら活発な話し合いを行っていたが、特筆すべきことは、多くの発言が「・・・さんはこう書いていますが・・・」と、ロイロノートの書き込みを見ての意見が多数出ていることである。(約15分の話し合いの中で、12回確認)。

以下、話し合いや他者の意見の確認をもとに読みが深まったと分析できる「話し合い後の書き込みの例」を示す。

下記のA児は、当初は「同じ木」「違う木」との2項対立的な視点で考えていたが、話し合いを経て豆太と医者様の捉え方の違いであると考えていったものである。

豆太は、一人で医者様を真夜中によびにいけるほどの勇気がでたから 神様が豆太だけにモチモチの木に火が付いているのを見られるようにしたのだと思います。医者様は木のことを科学的に言っていて、豆太は本当のモチモチの木を見たのだと思います。(A児)

(第9時)

各自は、ロイロノートにより、それぞれがレイアウトを工夫しながら、全時間の振り返りを整理するとともに、第1時に焦点化された課題に対しての学習のまとめを行った。

モチモチの木 豆太はどんな人なのか

①「モチモチの木」について分かることを読み取るう

今日の授業ではモチモチの木について考えました
わたしは、るかちゃんから聞いた医者様と豆太の見た光景はやはり違うんじゃないかと思いました
あとじさまが64歳だと最初きずきませんでした(汗)

え...私しか思わない?みんなきずいた?

⑤語りについて考えよう。

語りについて の巻
はじまり〜
語りはみんなの想像力を膨らませてくれるから
「え.....これどっち??」とかいうことがあるから語りはお話の中でもすごく役立つ存在なんじゃないかと思ひます。
多分...

豆太と医者様が見た「モチモチの木」はちがうのか。

わたしは違うと思います
理由はえほんのとうり
医者様と豆太は見ているものが違うと思ひます
医者様は「これ豆太はこれだと...」思ひます
多分...てかそうだよな
え...違う??
まあいいや...
あつてなかつたら
私の意見はこうです

④じさまは豆太にどうなってほしかったのさ。

やっぱりじさまは豆太に勇気のある優しい人になってほしいんだとおもひます。
あと
じさまのはらいたは演技だと思ひますなぜかというじさまはまめたにモチモチの木を見てほしいからだと思ひますあとよなかに1人でせつちんに行つてほしいからだとおもひます。

⑥豆太はなぜ医者様をよびに行けたのか

やっぱりわたしはじさまが死んじまいそんな気がしたから勇気をふり絞つて医者様をよんだんだと思ひます。
あと豆太はおくびょうだと思ひます。
理由はもし勇気があるなら1人でせつちんに行けると思ひますからです。

③じさまについての問いについて考えよう。

秋山 著太 君の「りょうしだから耳がいいんじゃないか」という意見に賛成(汗)です。
なぜかという
やっぱり、りょうしなら耳がよくない、
熊とかきても、
音とかが聞こえないからそうゆう理由で耳がいいんじゃないかと思ひます。

豆太はいざという時に勇気がある人...?

【資料2 児童がロイロノートにまとめた例】

(6) 学習状況分析～ICT 機器活用に関すること～

- 3-(6)にあるとおり、二次の課題追究過程では、全時間を共通した展開とすることで、ロイロノートへの作業・活用場面・活用方法が定着していることがうかがえた。
- 書き込みを読んで自分の考えを変えるなど、他者の意見を一覧できることにより影響を受けて考察を深めている姿が随所に見られた。
- 導入での課題設定、及び終末でのまとめにおいて、論点が構造化されており、読みの変容の様子も視覚的に整理されて、児童に学習の納得感・成就感が見られた。
- △ 本文を読み込んでいないと思われる書き込みが目立ち、その者が他者の意見を安易に取り込んでいる場面もあった。
- △ タイプミスや同音異語が放置されていることがあり、「言葉の学び」として不十分な点があった。

【事例B：ICT 機器を使っていない事例】

- (1) 実施時期 令和4年11月中旬～11月下旬
- (2) 対象 愛媛大学教育学部附属小学校5年
- (3) 単元名 「宮沢賢治に挑む！2rd」（全16時間）
- (4) 単元目標 「よだかの星（宮澤賢治）」の読みを通して、文章構成や展開について理解し、登場人物の相互関係や心情などについて描写を基に捉え、全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることができる。
- (5) 単元の流れ

次	展 開
一	【問いづくり】 ・「作品の心」というテーマを念頭に、初読により物語の全体像をつかみ、「話題」を決定 ○中心話題：「なぜよだかは最後に笑い、星になり、青い光で燃え続けているのか」
二	【課題追究】 ・上記の中心話題について課題追究
三	【まとめ】 ・中心課題に対する全体でのまとめ→個の感想の整理

- ICT 機器はほとんど使用せず、子どもたちの意見を教師がコーディネートし板書・整理する形で展開

(6) 授業の実際

(第14時)

報告者が参画・参観した第14時間目について報告する。

中心話題：「なぜよだかは最後に笑い、星になり、青い光で燃え続けているのか」について、前時に引き続いての話し合いを行った。

この「追究」場面では、毎時間「個→小集団→全体」という流れを取っており、課題について個々で考えをまとめた後、他者との交流へと展開していた。教師は、児童の発言が不明確な場合に言い直しをして返したり、議論が飽和状態となった場合には論点整理を行うとともに本文の確認を促したりするなど、卓越したコーディネート力を発揮しながら読みを深めさせていた。

以下は、本時を含めて、この展開に対する児童の振り返りに書かれた感想である。

自分たちで、話し合う順番を考え進むことができた。個人→小集団→全体ですること、考えを改めたり深めたり広げたりすることができた。(D児)

切なく苦しい物語だと思った。よだかは苦しいなんてレベルじゃない苦しみを味わっていたから、もし次に生き返ったら普通の人生にしてあげたいし、宮沢賢治もそんなことを願っていたと思う。(E児)

